

隠元禪師の中国での足跡を訪ねて(完)

副幹事長 福田哲也

原田会長＝「貴重な時間を設けて戴き、真に光栄。長崎史談会は1929年に設立され、歴史と実績を持つ団体で現在300名弱の会員で活動中である。昨年に引き続き、隠元禪師の中国での足跡を訪ね、当時の様子をこの目で見、この肌で感じ研究をさらに深めたいために再訪問した。今年もまた林副教授のご助言を賜りながら普陀山(国家A級景区)へ詣で、慧濟寺・普濟寺・法雨寺などの古刹を巡れたことは非常に勉強になった。特に心に残ることは、寧波駅から高速列車に乗って福清駅に着いた時、深夜にも拘らず、福清黄檗文化促進会の方々のお出迎えを受けたことである。ご配慮に心より感謝申し上げたい。」宋主任＝「私は万福寺へはすでに6回参拝しているが、原田先生は…」原田会長＝「また3回だが、宋先生の6回に追いつくよう努力したい」。「隠元禪師が長崎に上陸されて最初に立ち寄られたのが興福寺だが、その興福寺の現在の松尾法道住職も今回の研修旅行に参加される予定であった。しかし、諸事多忙で来ることができなかったことをお伝えしておきたい」。宋主任＝「松尾ご住職には呉々もよろしくお伝えください」。

通訳の「食事の用意が整いました」の声で、別室の迎賓室へ移動。本格中華料理(フカヒレスープや鮑の姿蒸し等々)に赤ワインという豪華な食事での特記事項として、次 宋主任＝「これは長年温めてきた私案だが、黄檗文化について中国と日本、特に長崎の学者を福建省に招き、シンポジウムを開催したい考えを持っている。そのときは原田先生や皆さんにも是非お越し願いたい」。原田会長＝「お招き戴ければ、喜んで馳せ参じる」。およそ2時間の会談・食事が終了。林副教授と林会長の安堵された顔が印象的だった。

13時過ぎ、「福州悦貨酒店」を出発し、同市内にある開元寺(空海が半年間過ごした寺院)に立ち寄る。山門を潜ると、「空海入唐之地」の碑と空海立像があり、線香の煙が絶えない。延暦23年(804)現在の長崎県平戸市大久保町田ノ浦を出航した第16次遣唐使船4艘は、途中暴風雨に遭い、うち2艘は消息を断つ。空海の乗った第一船は34日間漂流した後、現在の福州市から北へ約250km離れた海岸へ辿り着く。しかし、国書も印符もないために一行は罪人扱いのまま上陸は許されなかった。この時、空海が大使の藤原葛野麻呂に代わって書き上げた「上申書」(『大使の為に福州の観察使に与ふるの書』)の文章の壮麗さによって全員が救われることになる。

空海は長安(青龍寺東塔)の高僧(惠果阿闍梨)のもとで学び真言密教の奥義を極め「阿闍梨遍照金剛」の称号を授かり帰国。弘仁7年(816)47歳の時、霊峰高野山に開創の斧を入れ、比叡山と並び日本仏教における聖地を

拓く。

うだるような暑さもあって早めに福州空港へ向う。これが幸いし、途中、交通渋滞に巻き込まれながらもどうにか空港着。我々が乗る18時45分発の搭乗手続きが既に始まっていた。林副教授や黄檗文化促進会の皆さんとの別れの時がくる。特に最後の最後まで私の手となり足となって戴いた念副会長に感謝しつつ、上海浦東空港行の機上の人となる。僅か5日間ではあったが、隠元禪師の中国での足跡は実に広範囲に及んでいたこと。膝痛のために多くの人たちの助けを受けながらの旅であったこと、などが頭をよぎる。

林副教授の著書「潮音に聞く—黄檗ゆかりの地 その二 浙江普陀山—」(この冊子を林副教授に戴き、機内で読む)の冒頭に、「父は何のために湘(湖南)の地へ向かったのか、どのような職業あるいは官職に就いていたのか。これについて隠元の語録や年譜は何も言及しなかった。しかし、隠元を理解するに、これは重要な問題である。」と記されている。

さらに冊子には、「京の黄檗山の太極殿に、隠元が生前持ち続けた父母の位牌はなお大事に供養されている。その位牌の前に立ち、焚く線香から上がる縷々の清煙に、隠元は嘗て何回も父の姿を想像しただろう」とも記されている。引用が長くなったが、6歳の時に別離した父に会いたい一心で21歳から始まった隠元禪師の旅も、苦難と多くの慈悲に導かれながらの旅ではなかったのか。すると、膝痛で苦しんだ己の旅と似通っている…。などと言えば、「こじつけが過ぎる、苦勞の本質・度合が違う…」と、隠元禪師にお叱りを受けるだろうなあ…。そんな空想めいたことを考えているうちに、飛行機は上海浦東空港に着陸、すでに21時を過ぎようとしていた。 完



雪峰山崇聖禪寺にて '15.7.15